

## Study on the promotion of universal design

古瀬 敏

デザイン学部空間造形学科

Satoshi KOSE

Department of Space and Architecture, Faculty of Design

静岡文化芸術大学の建学理念の一つであるユニバーサルデザインを実践するための仕組みとして、どういうやり方をとればスムーズに活動できるかなどにつき、基本的な検討を前年に引き続いて行った。平成16年度は、米国からユニバーサルデザインの専門家を招聘し、しずおかユニバーサルデザイン大会での共催事業として公開講演会を開催して対外的な情報発信に努めるとともに、ユニバーサルデザイン国際会議に参加して情報交換を行った。

Fundamental study was conducted to find out effective method of research on universal design, which is the key concept of the Shizuoka University of Art and Culture. A prominent researcher on universal design was invited from the States, who delivered a lecture on accessible tourism during the Shizuoka Universal Design Convention. A lecture by the author supplemented information on general situation in Japan, and a discussion session with questions from the floor followed. Besides, the author participated in a conference on universal design (The Third Conference on Designing for the 21st Century) held in Rio de Janeiro, to exchange ideas with overseas colleagues.

### はじめに

当大学の建学の理念であるユニバーサルデザインを、研究と教育の双方において実体化するため、文化・芸術研究センターを中心として研究グループを構築し運営していく手法を検討するとともに、現在直面している具体的課題の解決策を考えた。本テーマを提案する最大の理由は、当大学がユニバーサルデザインに関しては他に引けを取らない、ということ第三者に明確に見えるようにすることである。現状では、研究者が個別に外部からの要請を受けている状態であり、せっかく大学全体として持っている学際的なポテンシャルを十分にPRできていない。そこで、より有効な手法を検討するために、ブラジルのリオデジャネイロで開催された第3回ユニバーサルデザイン国際会議に参加して情報を交換するとともに、この点について経験の深い米国の専門家を招聘して、本学において開催されるしずおかユニバーサルデザイン大会の場での国際講演会を企画し、実行した。なお本研究は、平成16年度学長特別研究（研究代表者：古瀬敏；共同研究者：デザイン学部渡邊章互、川口宗敏、迫田幸雄、坂本鐵司、三好泉、迫秀樹）として実施した。以下その経緯と結果を報告する。

### 第3回ユニバーサルデザイン国際会議の概要と成果

ユニバーサルデザイン関係者の情報交換などを目的として1998年に第1回がニューヨークで開催されたユニバーサルデザイン国際会議 (Designing for the 21st Century) の第3回目が、2004年12月にブラジルのリオデジャネイロで開催された。2000年にロードアイランド州プロビデンスで開催された第2回会議の後、米国で起こった同時爆破テロ事件が南北格差の問題を浮き彫りにしたことから、このテーマを絡めずに開催はできないという判断が関係者によってなされ、当初はキューバでの開催が検討された。しかし、現在米国はキューバとするとどく対立しており、研究費など連邦政府からの助成金をキューバでの会議参加に支出することはいっさい認めないという米国政府の強い姿勢のために、予定どおりの開催は不可能となった（こうした行きつ戻りつの中に横浜での国際ユニバーサルデザイン会議が企画され、2002年11月から12月にかけて開催された）。そこで、この分野での留学生がいるなど関係が深いブラジルが最終的に国際会議開催を引き受けたものである。地理的に遠く旅費が数倍かかるといふ事情から、米国からの参加者は過去2回のように増えず、その分だけ参加者が減ったと言ってもいいであろう。手元にある参加者リストによれば、登録者はほぼ400名で、第2回に比べて200名ほど少ない。その代わり、ポルトガル語とスペイン語が母国語であ

るラテンアメリカ諸国の参加者が目立ち、中南米事情を主要なテーマとしたいいくつかのセッションは、スペイン語・ポルトガル語のみで進行することになった。

全体のプログラムとしては、会議前日からワークショップなどを設定して少人数での議論が開始され、また本会議が終了した翌日にはユニバーサルデザイン教育者フォーラムが行われた。これらは過去の形式にほぼ沿っている。

筆者は、本会議では自身の論文発表を行っただけでなく、発展途上国に対して伝えるべき先進国の経験を議論するセッションを司会した。さらに、会議開始に先立って行われたUD7原則の再評価についてのワークショップでは、日本の状況を報告した。また、定例となっている会議終了の翌日に開催された教育者フォーラムにも参加して、本学でのユニバーサルデザイン教育の状況を報告するとともに各国からの参加者と意見交換を行った。

会議の主要な内容は会議論文集を含めて下記のホームページで見ることができ、ダウンロードすることもできる。

<http://www.designfor21st.org/>

なお今回の会議でも前回同様にロン・メイリス記念賞受賞者が選定され、21の個人と団体に贈られた。受賞者の中にはとくに受賞していてもおかしくなかった人も一方で、その活動内容はまだまだバリアフリーの色彩が強いのではないかと推測させる組織なども混じっていたが、地域によってバリアフリーとユニバーサルデザインとに関わる事情が異なることなどが背景にあるのだろう。

12月9日の開会式の際の基調講演はインドにルーツを持つ英国のジム・サンデュー教授が行う予定であったが体調不調で参加がかなわず、原稿が代読された。また12月11日の閉会に当たっての報告は旧東欧にルーツがある米国のスーザン・シナージー女史(雑誌メトロポリスの編集主幹)で、いずれも南北格差や今後に向けての課題などについて触れているが、とくに後者は会議場に到着するまでのドタバタも含めて生き生きとした記述がなされていた。そのシナージー女史の講演の中での、21世紀においてどうしても解決しなければならない重要課題とされている高齢

化問題(ユニバーサルデザインがその核心)と地球環境問題とを比較したとき、地球環境問題はビジネスに結びつくテーマとなっていて、それゆえにサステナブル建築の会議が開催されると全米から数千人が参加するのに、ユニバーサルデザインはまだビジネスとしては盛り上がりずその数分の一しか参加者が集まらない状況はどう判断すべきだろうか、という問いかけは、多くの参加者にとっては意表をつくものであったかも知れない。筆者の見るところでは、地球環境問題は毎月の光熱費の請求書として否応なく突きつけられるがゆえに、身近かつ喫緊の課題としてそれを改善するインセンティブが働きやすく、一方ユニバーサルデザインは悪いデザインのもたらす外部不経済がほとんど見えないために、改善への意欲が湧きにくいということになる。(たとえば住宅において悪いデザインのつけが居住者に回ってくるのは20年後、ときには30年後である。また製品では、そのデザインのまずさが個々の利用者に与える不利益はごく些細で、ほとんどの場合にそれを直す価値があるとはみなされない。)つまり、状況を変えるには、当事者としての切実感を持たせるべくみなみなならぬ努力をするか、あるいはこれまでとまったく異なったアプローチを見いだす必要があるということになる。

なお、今回の会議では、横浜で2002年に開催した国際ユニバーサルデザイン会議の成果を受ける形で企業が中心になって設立された国際ユニバーサルデザイン協議会の参加各社の成果を発表する特別セッションが設定され、これまで対外的にあまり見えなかった日本でのユニバーサルデザインに対する民間の取り組み状況が、製品展示と合わせて報告された。さらに、ほぼ同一の内容は、2005年4月初旬にロンドンで開催されたInclude2005でも繰り返して報告されている。ただし、そうした動きがわが国のふつうの企業にも共通しているかと言われれば、そこまでは行っておらず、ユニバーサルデザインに積極的に取り組んでいるのはまだ少数派に留まっている事実は忘れてはならない。

## ユニバーサルデザイン講演会の開催

平成16年度のしずおかユニバーサルデザイン大会は本学を会場として開催されることになったので、その一環として本研究予算を用いて共催の形を取ったユニバーサルデザイン基調講演会を2004年12月17日(金)午後開催した。米国からはカリフォルニア州立大学サンディエゴ校付属研究所の研究員であるスコット・レイズ博士を招き、とくに同氏の造詣の深い「観光のユニバーサルデザイン」を中心として話題が提供された。引き続き著者から「超高齢社会におけるユニバーサルデザイン」と題して、米国に先んじているわが国の急速な高齢化がもたらす問題について述べた。その後、会場からの質問に答える形でやりとりを行い、ユニバーサルデザインの持つさまざまな側面を議論した。このしずおかユニバーサルデザイン大会の記録は静岡県のホームページに掲載されているので、詳細は以下を参照されたい。なお、米国からの招待講演者は当初はノースカロライナ州立大学付属ユニバーサルデザインセンター所長が予定され、そのように広報されたが、次節に述べる事情によって変更を余儀なくされた。

[http://www.pref.shizuoka.jp/ud/cases/ud\\_syo/ustaikai3.html](http://www.pref.shizuoka.jp/ud/cases/ud_syo/ustaikai3.html)

また、前年度平成16年1月に開催された浜松ユニバーサルデザインフェアの際のロジャー・コールマン教授と筆者の講演、そして引き続きの質疑の記録はとりまとめが遅れていたが、以下のページからダウンロード可能となっている。

<http://homepage2.nifty.com/skose/KoseHPJ.htm>

これらの記録を見ればわかるように、基調講演を受けての聴衆からの質問ではほぼ同様な論点が出ており、逆に言えばそうした質問に答えるのがユニバーサルデザインのさらなる推進には必要だということである。ここで典型的な2例についてコメントしておこう。

一つ目は、便利になれば人は急いでしまうので急げさせないように適度に不便にしておくべきではないか、という指摘である。これは基本的な問題を理解していない聴衆から繰

り返し出される質問である。健康で何不自由ない人が「適度に不便に」というとき、能力が衰えているとたとえばトイレに行くためにも千仞の谷を越えなければならないような努力を要求する可能性がある、という点についての想像力が欠如しているのである。ユニバーサルデザインは、このように本質的な目的を遂行しようとするときに間に立ちはだかる「無意味な」バリアを取り除くためのものであり、途中の過程を努力して突破したい人からそうした楽しみを取り除いてしまう意図は持っていない。

もう一つよく出される質問は、視覚障害者誘導用ブロックの評価についてである。コールマン教授が答えているように、ブロックは中途半端な解決策であり、その意味でユニバーサルデザインとはどう呼べない。ブロックは位置についての的確な情報を与えないだけでなく、足元が怪しい人々にとっては転倒のリスクを高める罠になってしまう。「警告」ブロックは容認するが「誘導」ブロックは拒否する、という立場がとりあえずバランスの取れた回答であろうが、本来なら危険をわざわざ持ち込むことは許されてはならない。ブロックが導入される前は視覚障害者にすべての問題がしわ寄せされていたとすれば、現在のようにともすれば理念が欠如したままブロックが敷かれている状況は、逆に行き過ぎであろう。なお、最近各所で試行されている電子ナビゲーションシステムが誰にとっても有効なように導入されれば、ブロックの問題点を克服したユニバーサルデザインとなる可能性を持っている。

## おわりに

ユニバーサルデザインということばが使われるようになってから20年経つが、その発祥の国である米国でこの分野に対して大きな額の連邦政府予算を配分してきたのはNIDRR、米国障害リハビリテーション研究所(米国教育省傘下)である。そのNIDRRが2004年秋から始まる予算年度についてこれまでの配分方針を大きく変更し、ノースカロライナ州立大学付属ユニバーサルデザインセンターなどからの予算申請を却下するという

事態が生じた。そうした決定に至った詳細な事情は定かではないが、その結果として、ユニバーサルデザインの父と呼ばれ、1998年に亡くなったロナルド・メイス所長によって1989年に設立された同センターは、その存続自体が危ぶまれることになった。最終的には州に予算を確保してもらうことで閉鎖を免れたが、数少ない特定の資金源に頼りすぎることによる運営基盤のもろさが露呈することになった。同じようにNIDRR予算により数々の研究成果をあげてきたニューヨーク州立大学バッファロー校のIEDA センターは、ユニバーサルデザインセンターとは異なって研究受託の幅を拡げていたので、NIDRRの研究資金を切られた影響はさほどではない、ということであった。

じつはこのことはわが国にあっても無関係ではない。国立研究所の独立行政法人化にならって国立大学も独立法人化され、政府予算からの大学運営経費は毎年少しずつであるが確実に減らされる。その分を競争的研究費や研究受託によって補填して確保しなければ組織の存続が危うくなる、という流れができていく。そうした一般情勢を考えると、とくに本学においては静岡県、浜松市、そして地元民間企業などとさまざまな形で連携していくことが必須であると考えられる。平成16年度中にはこの関係での動きは具体化しなかったが、平成17年度になってユニバーサルデザインを専門とする本学教員と静岡県ユニバーサルデザイン室、そして静岡県工業技術センターとの情報交換会が発足した。静岡県では以前からユニバーサルデザインアイデアコンクールを行うなど製品化の萌芽もそれなりに見えてきており、それらをどういうふうにか活かしていくか、今後の展開がより重要になっている。

#### 参考文献

- 梶本久夫監訳(2003)「ユニバーサルデザインハンドブック」、丸善
- 川内美彦(2001)「ユニバーサル・デザイン：バリアフリーへの問いかけ」、学芸出版社
- 国土交通政策研究所(2001)「バリアフリー化の社会経済的評価の確立へ向けて：バリアフリー化の社会経済的評価に関する研究(Phase II)、国土交通政策研究第

- 3号、国土交通省国土交通政策研究所
- 古瀬敏(1999)「住まい、建物、そしてまちのユニバーサルデザイン」、「人間福祉の発展をめざして」、pp. 198-212、勁草書房
- 古瀬敏(2001)「建築とユニバーサルデザイン」、オーム社
- 古瀬敏(2002)「ユニバーサルデザインへの挑戦」、ネオ書房
- 古瀬敏(2005)「ユニバーサルデザイン研究センターの設立と運営に関する研究、静岡文化芸術大学研究紀要第5巻、pp. 127-131